



博士（人間科学）学位論文 概要書

高齢社会におけるエイジングの位相

（老後問題としての介護問題）

2002年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

荒井 浩 道

指導教授 濱口晴彦

近代の帰結である高齢社会において「老いの意味」は喪失／剥奪状態に陥り、現代人は「老い方＝生き方」の方向性喪失に直面している。もちろん前期高齢期においては、「アクティブ・エイジング」や「プロダクティブ・エイジング」等の「近代的」な「老いの意味」を見いだすことも可能であろう。しかし、その先にある「老衰」を否定できない後期高齢期において「老いの近代化」は限界を呈し、「老いの意味」は行き場を失う。ここにおいて「老後」は、「問題」として新たに社会的に「発見」されることになる。そこに別様な「意味」があるとすれば、如何にしてそれに接近すればよいのだろうか。またそのような「意味」が見いだせないとすれば、如何にして老いて＝生きていけばよいのだろうか。この問いは、エイジング研究の方法論的関心から注目されるだけではなく、市井の人々が老いる＝生きる上でも大きなイシューである。

本論文は、上述の問題関心から今日の高齢社会における「エイジング (aging)」の様相を位置づけ、「老人介護」を「老い」のリアリティ構築／再構築の場として注目していくものであり、次のような章立てから構成されている。

第1章「エイジング研究の展開」では、既存の「エイジング研究」がレビューされる。まず、アメリカ社会老年学における諸理論を批判的に検討したうえで、エイジング研究の新潮流として「批判老年学 (critical gerontology)」(主として H.R.ムーディ) のパースペクティブに注目し、「探索的 (heuristic)」な研究の方向性が評価される。そして、これまでのエイジング研究に抜け落ちていた点として「老後問題としての介護問題」がクローズアップされる。

第2章「心理社会的エイジングの視角」では、まずライフコース論とライフサイクル論を手がかりに、個人が「老いること」としての「エイジング (aging)」を、「心理社会エイジング (psycho-social aging)」としてとらえる理論的基礎付けの作業が行われている。現代社会において「老いること」が、「老いゆく身体」と「老いにくい社会」というアンビバレンスに、「個」あるいは「主体」がバランスをとる心理社会的運動であることが主張され、その「老いにくさ」として「インテグリティ・クライシス」が確認される。また A.メルッチの議論を手がかりに、複合社会における「身体的な老い」が「自然」なものではなく社会化／医療化されている事態を指摘し、身体としても「老いにくい」現象に注目する。だが、その議論を踏まえた上でも強調されることは、個人のエイジングの「有限性」という地平から眼差せば、「老衰」の問題は、不可避であるということである。

第3章「老いの人称」では、前章の議論を踏まえた上で、そのような「個」や「主体」にとっての「エイジング」という1人称的視角から、「老い」に接近することの困難性／不可能性に注目する。そしてこの限界を乗り越える視点として「2人称の老い」を提案し、「老人介護」とくに「家族介護」のフィールドが「老い」のリアリティ構築／再構築の場として注目されることが主張される。

第4章「2人称の老い」では、前章で提示された研究視角としての「2人称の老い」から、家族介護に関する「グループ・インタビュー」のデータが分析され、以下の4点が確認される。すなわち、①1人称から「老い」を扱うこと

の困難性，②「古い」を照射する研究視角としての「2人称の古い」，③「1人称の古い」構築の資源になりうる「2人称の古い」，④「古いの人称」における相互的な構築性，である。ここでは，「介護問題」における「古い」は被介護者だけの問題ではなく，介護者の問題でもあり，「ケアすること／されること」として2重に主題化されることが強調される。なおかつ，この「2人称の古い」から，今後の調査研究において「ケアすること／されることの意味」を探索的に問うていく必要性が主張される。

第5章「ケアの倫理」では，前章において「エイジング」とともに注目される「ケア」概念そのものに内在する問題を整理するために，これまで「ケアの倫理」として展開された議論に注目し，それが「女性性」や「自己決定権」との関連で扱われていた閉塞性を指摘し，「ケアの倫理」を乗り越える視点として「2人称の古い」の可能性が主張される。

最後に結びにかえて，社会老年学の可能性を探るべく生命倫理学との接点に注目している。まず D.キャラハンの議論を批判的に検討し，「古いの医療」において「死の権利」が「死の義務」へと容易く転化する危険性が指摘される。そしてその根底にあると考えられる個人閉塞的な「権利／人権」概念の隘路を克服する視点として「他者／2人称」の重要性が主張され，その視点から家族介護を分析していくことで，「介護の両面」をとらえる可能性が検討される。